

未来航路

20XX年を目指す中小企業の挑戦の旅

ぶらり展示会

10月3日から7日の5日間、大阪・関西万博EXPOメッセ「WASSE」South会場にて開催された「未来航路 20XX年を目指す中小企業の挑戦の旅」。全83社の未来思考あふれる展示が並ぶなか、特に来場者の注目を集めていた5社取材した。

中

小企業庁と独立行政法人中小企業基盤整備機構主催の「未来航路 20XX年を目指す中小企業の挑戦の旅」は、社会課題の解決に挑戦し、未来へと進んでいる中小企業を「未知の大海へと航海に繰り出す挑戦者」に見立て、未来思考の製品、サービス、技術などを紹介する体験型展示イベントである。

当イベントでは、中小企業が持つ価値を「伝統の継承と革新」「精巧なモノづくり技術」「最先端デジタルテクノロジー」「包摂的なアイデア」「自然の恵みを活かす発想」の五つに定義し、それぞれの価値に合致した強みを持つ中小企業83社の技術を展示した。10月3日に行われた開会式では、中小企業庁の山下隆一長官が登場。

「中小企業のもつ価値や魅力が世界にも認知され、万博を契機としたビジネスチャンスが創出されることを期待します」と挨拶した。

西陣織を次世代へとつなぐ

展示エリアに一歩足を踏み入れると、キャラクターの絵をあしらった巨大なタペストリーが目に入り、飛び込んできた。「伝統の継承と革新」ブースに展示した岡本織物株式会社（西陣岡本）の「MANGA

×西陣織金襴絵箔順引き模様引箔ひゅらん。」（写真③）である。

創業100年超の歴史を誇る同社は、これまで主に全国の神社仏閣向けの織物を手がけてきた。そんな長年の業歴で培ってきた西陣織の技術を武器に制作したのが、このタペストリーである。

岡本絵麻専務は制作の経緯を次のように語る。

「西陣織の魅力や職人が持つ高い技術を後世に伝えていくためには、西陣織そのものの新たな可能性を追求することが不可欠であると思い、伝統と革新を融合した西陣織タペストリーの制作に挑戦しました。この作品には代々受け継がれてきた西陣織の伝統技術と、若手クリエイターのみずみずしい感性が凝縮されています。絵は京都を拠点に活動している2人組クリエイターユニットの『ぐらにゅーとー』さんに描いていただきました。制作に合わせて、タペストリーの製造工程を動画で公開するという試みも行った。製品の製造工程は表に出さないのが業界の慣習だったが、伝統技術の発信と職人のモチベーションアップを目的に、各工程を担う職人への取材を敢行。その様子を同社のユーチューブチャンネルで公開した。実際に、「自



①日本全国から83社の中小企業が出展した ②大阪・関西万博公式キャラクター「ミャクミャク」 ③岡本織物が手がけた西陣織タペストリーは、伝統技術と若手クリエイターのコラボレーションで生まれた ④KGMモーターズの横山文洋COOと小型モビリティロボット「mibot」

分の仕事作品にどんな影響を与えているのか理解できた」などと、多くの職人から好評の声が寄せられたという。

世界をワクワクさせるモビリティ

続いて、「精巧なモノづくり技術」のブースを訪れると、黄色を基調にした次世代モビリティが目にとまった。KGMモーターズ株式会社が手がける小型モビリティロボット「mibot」(同④)である。

mibotは1人乗りかつ短距離移動に特化した原付ミニカー規格の電気自動車で、価格は1台あたり税込み110万円。全長約2.4メートル、全幅約1.1メートル、全高約1.4メートルとコンパクトな車体特徴的で、カラーバリエーションは黄色を含めて5色展開しているという。

「法人営業や日々の買い物といった、1人かつ短距離の移動を普通自動車で行う場合、座席やトランクが空くなど、車の機能を持て余してしまいがちです。その点、mibotは1人乗り特化した設

計で、購入価格や維持費も普通自動車と比べて安価という特長があります。エネルギー効率も良く、CO₂排出量も少ないですし、車載ソフトウェアを遠隔でアップデートできる仕様となっているので、将来的には自動運転にも対応する予定です」(横山文洋COO)

今年生産した300台はすでに予約を締め切っており、現在は2026年7月〜27年6月生産分の予約を受け付けているという。

「小型モビリティロボットで世界をワクワクさせる」をミッションに掲げる同社。今回の出展を弾みに、製品認知度のさらなる拡大を図っていく構えだ。

続いて、「最先端デジタルテクノロジー」のブースに足を運ぶと、アニメや特撮作品に登場するようなロボットが出迎えてくれた。株式会社人機一体の「零式人機ver.1.3」(同⑤)である。

同社は39年末までに、「あまねく世界からフィジカルな苦役を無用にすることを目指し、人間が自分の身体のように操作できるロボットの社会実装に向けた技術開発に取り組んでいる。実際、すでに社会実装が進んでおり、24年からはJR西日本の営業線における高所メンテナンスに、同社の技術



⑤人機一体の「零式人機 ver.1.3」 ⑥⑦ Raise the Flag. が開発した視覚障害者向けの自立支援機器「SYNCREO」（着用写真は同社スタッフ）
⑧カポックの実は綿 ⑨KAPOK JAPAN が手がけるダウン

を実装したロボットが活躍しているという。

続いて、「包摂的なアイデア」のブースを訪れると、アイマスクとウェアラブル端末を着用した男性が、何やら慎重に歩みを進めていた。株式会社 Raise the Flag. が開発した視覚障害者向けの自立支援機器「SYNCREO」（同⑥⑦）の装着体験である。

SYNCREO は音と振動を通じて視覚障害者の空間認識を支援するデバイスだ。独自開発のカメラシステムと視覚障害に特化したマルチモーダルAIを用いて、空間や障害物を検知。周囲の状況を音と振動でフィードバックすることから、重度の視覚障害でも単独での行動が可能になると増田優子CSOは説明する。

「SYNCREOは通路の幅、障害物の大きさや位置、人の動きといった周囲の空間はもちろん、テーブルの上にある物の位置といった目の前の状況を正確に認識し、音声と振動でフィードバックします。たとえば、スーパーに買い物に行った際には、入り口を見つけ、売り場の状況や通路、陳列棚を認識し、障害を回避しながら、手に取りたい商品の位置や価格などを知らせてくれます」

増田CSOによると、SYNCREOは白杖や盲導犬と併用することで、視覚障害者の単独行動をよりアシストできるという。発売は26年を予定。同社が目指す「視覚障害があっても安心して働き、学び、移動できる未来」は、もう目前まで迫ってきている。

木の実由来の新素材「カポック」

最後に訪れた「自然の恵みを活かす発想」ブースの入り口付近に展示していたのが、木の実由来の素材「カポック」を活用した製品を展開しているアパレルブランド「KAPOK KNOT」（同⑧⑨）である。看板商品は防寒着だ。

KAPOK JAPAN 株式会社の深井喜翔社長は、商品の強みをこう説明する。

「カポックは主にインドネシアに自生する植物です。カポック繊維は軽量かつ保温性に優れているため、従来のダウンと比べても軽く、暖かさは抜群です。また、従来品は水鳥の羽毛を使用していますが、当社の製品はアニマルフリーですので、持続可能性も高いです」

商品は同社のオンラインストアのほか、全国の百貨店でのポップアップ等で購入できる。